

大通 和座 通信

YAMATOZA

日々新面目

其の三十一

安東伸元

二〇〇八年最初の和座通信巻頭稿を、次世代の中心的旗手であつてほしいと念じる若い人たちの言葉で埋めたいと思いません。筆者は、おそらく数年後には小・中学校の音楽教師になつていくはずの一九人の大学院生たちです。三日間の集中講

義を受けて、本当に今までの自分の中では生まれなかつた考え方で心の中の大切な部分を揺さぶられた、そんな三日間であつたように思います。能や狂言で用いられる音楽についてですが、これは本当に深く考えさせられました。現代では、クラシックやジャズ・ポップス…といったような音楽が世の中にたくさん溢れています。また、自分も大学で学ぶ音楽といえ、西洋音楽がほとんどで、それが普通のことだと考えていました。しかし講義を受けてから、今まで自

分は、確かに古典伝統的な音楽を特殊なものだとみなし、触れることに抵抗を持つていたなと感じました。先生は伝統芸能と音楽の本質的な部分について、また人間と音楽との関係について、ほとんど何もわからなかつた私に、知らないことを気づかせて下さいました。この三日間は、私の人生の中でも印象に残る濃い三日間となりました。

私たちが普段勉強していることは、ヨーロッパで書き方が決められた楽譜であつたり、音の構成であつたりします。また、私にはどこかで音楽の一番進んでいるのはヨーロッパだという認識があるし、逆に日本や民族音楽は古く遅れている音楽だと思つてるところがあります。それはやはり、西洋音楽が私の体の中に染み付いているからだと思います。だけど、もし音楽が西洋のものだけなら私たちはなんて狭い分野の勉強をしているのだろうと考え直すきっかけになりました。バイオリンの曲と能の舞が一緒になつたとき、何ともいえない緊張感や感動を味わつたからです。息を呑むような舞でした。この三日間で、私は自分の音楽に対する考え方や日本の音楽に対する考え方を変えることができました。私も将来、音楽教育に関わつていく仕事をする機会があるかもしれません。日本人が日本の音楽を「良い」と思えるような感性を育てられるように、伝えられたらいいなと思いまし

た。「閑吟集」第五十五番より抜粋された先生の歌を初めて聞いた時、本当に「心が震える」という体験をしました。頭の中に情景が鮮明に浮かんで、この歌が真上から突き刺さってくるような感覚を覚えしました。「西洋音楽を聴いて感動すること」が長い間私の中の大きな悩みでしたが、少し解決してきたように思います。古典伝統芸能に触れて感じたような「感動の気持ち」を、今度は私が与えられるようになりたいという漠然とした目標もできました。私の中でこの変化が起きたのは、自分の生まれた国にも古典伝統芸能というものがあることを知つたからではないかと思えます。それを知つたことで、自分にもしっかりと土台があつたことがわかり、今まで感じていた、何とも言えないフワフワした感覚から少し抜け出せたように思います。先生がおっしゃつて初めて気がついたが、日本は本当に古典の芸術文化に触れる機会が少ない。今までそれを不思議とも感じなかつたが、よく考えてみると、他国は自らの芸術文化に誇りを持ち、大切にしている。それに対し、日本はせっかく誇るべき芸術文化を持っているのに、自分とは関係のないもののように思っているのは、本当にもつたいないことだと思つた。また、先生は自国の古典芸能を知つた上で西洋音楽も学ぶべきであり、西洋のものが駄目だなどと否

定されることなく、両者のバランスが大事だと行って下さった。今まで西洋音楽にどっぷりと浸かってきた私たちにとってはそのご指導で本当に救われた。音楽の分野で勉強している日本人は、パワーも派手さもあたる外国人の演奏家に憧れ、追い求めている風潮があるが、今回先生のお話をお聞きし、日本人なりの演奏でも良いのではないかと思った。日本の古典芸能を知った上で西洋音楽に向き合うとどう変わるかはわからないが、何かしら日本人の味が出せるような気がした。今回習ってみて、本当に日本人には『日本』が欠けていると思いましたが。欧米化が悪いことだとは全く思いません。むしろ、外国の文化を理解することはとてもよいことだと思えます。しかし、日本人が日本を知らないことは世界的に許されるのでしょうか。アメリカは、多民族国で、それこそたくさんの国の文化を受け入れています。しかしアメリカは、アメリカ本来の文化も、星条旗もとても大事にしています。ヨーロッパなど、他の先進諸国でも同様です。日本人は他の国の人に比べて自分の信念をきちんと持っていない人が多くと言われます。それは、自国の文化を知らず、本来無い文化ばかりを取り入れようとしても対処の仕方がわからず、外国を手に本に周りの人を見て真似をしても、環境や人種が違ったため同じようには出来ず葛藤が

生じる。私はその葛藤こそ、自我が不安定になる一つの要因ではないかと、今回の授業を通して思いました。自国をないがしろにするのは、もうこのあたりでやめなければいけません。それを実行できるかどうかは、先生もおっしゃったように、これからの未来を担っていく私たちの世代にかかっていると思います。このまま通り過ぎて行つた先にある未来の日本は、いったいどのよなものなのか、予想するだけで悲しくなつてしまいます。しかし、今ならまだ間に合うと思います。今回授業を受けて、日頃私たちが面白いと思っている娯楽と姿形は違っていました。身体はまだ『日本』を覚えていました。このことをしみじみ実感しました。私たちが、この感覚を忘れずにそのまま後世に伝えていくことが出来たら、かならず『日本』は戻ってくると思えます。私は今回の授業を通して「やっぱり教師になりました」という夢を再確認することが出来ました。同時に、日本に生れて、日本人でよかつたと本当に思いました。このレポートが綴られた場所は、文化芸術情報の枯渇した山間僻地ではありません。宍道湖を幹にした豊かな食文化と、八雲立つ風光明媚な自然をもち、もの静かな城下町の空気が全国からの旅人を誘引する山陰の島根県松江府がその場所です。筆者たちは、この松江市

に所在する国立大学法人「島根大学」の教育学部音楽教育研究科に在籍して勉学に勤しんでいる学生たちです。町全体を包む、思索を促すような文化の香りが作用しているのか、島根大学の音楽教育は、以前から全国に令名を馳せています。その香りに惹かれて、英国人英語教師のL・ハーンは松江の女性と結婚し、小泉八雲と名乗つて日本に帰化した。そのように、他の何処よりも芸術文化の芳香を漂わせた環境の中で、教師を目指して音楽に勤しむ学生たち十九編のレポートが表明する率直な古典伝統芸能観を読んで、新年早々また改めて考えさせられることが多々あったので、こうして長い抜粋引用になるこの報告を、やむにやまれず試みているわけです。講義は昨年十二月の二十六日から二十八日の三日間でした。古典芸能「能楽」と現代社会の関係を論究する講義、謡の歌唱と舞の演習、能・狂言面と装束を使った体験演習、それに学生の洋楽演奏に能の舞を合わせる試みを見せるという内容の、三〇時間の集中講義でした。私は、この集中講義を八年間続けています。やむにやまれぬ理由というのは、この学生たちのような選ばれたといつてもいい者たちと、我が国の古典伝統芸術との相関関係が依然として改善していない現実を痛感するからです。このような講義が学生たちにある種の衝撃を与える

いうことは、常日頃彼らがいかに古典伝統芸能と隔絶したところにいるかという証左です。その異常な現状が一向に問題視されず、当たり前のこととして全国的に放置されています。実は、このことに気づいた学生が明らかに現れ出したと思われるのです。今年のレポートには、明らかにそう読める節が察知出来ます。しかるに彼らを取り巻く社会は、旧態依然とした様相を変えようとしなない。本稿のような報告が研究者の参考として真剣に取り上げられる様子もない。

一方大都会では、特別高級情報として、古典(伝統)芸能が麗々しく取り上げられる。そのための粋をこらした印刷物は、華々しい装いで芸術性を宣伝するのに躍起。マスコミは、古典(伝統)芸能を扱うのに、庶民の窺い知れぬ禁裏御用の秘密を曝すがごとき興味をそそって番組を作る。このような仕組みだけが厳然と在って、島根大学の学生たちのような、目覚めた者の知的好奇心を、即座にそして十分に満たす処が用意されていないのです。我が国の民意を主導する有識者や文化人と言われる者たちは、わが身の安泰を保守するために如何なる改変もよしとしなないように見えます。つまり、中央や主要都市においての実質的な意味も効果も持たない絵空事のような様態づくりにのみ専念腐心して、地方の荒廃を意に介さない体制が敷き詰められているのです。ま

た一方、新年に合わせて能楽協会から届いた印刷物があるので、ついでにこれの紹介もします。小・中学生を対象にした普及公演の案内です。子供の五人囃子を描いた漫画のイラストと共に、次のような説明文が読めます。まず大見出しに文化庁芸術団体人材育成支援事業「さわってみよう能の世界！」とあり、それに添えて、笛つてすぐに鳴るのかな？ 小鼓はどうやって打つの？ 大鼓つてすごい迫力！ 太鼓を打つて楽しそう！ 仕舞つてカッコイイ！ 能面つて不思議だね！ といった副題が続きます。父兄や教師向けと思われる説明は、

次の通りです。 世界文化遺産になった能楽、本物に触れて日本文化の「気」や「間」を感じてみよう！子供たちにとつて様々なことに興味を持ち、チャレンジすることはとても大切なことではないでしょうか。普段は触れることのない能の世界を身近に体験できるよい機会だと思えます。お気軽にご参加ください。 公演の主催は社団法人能楽協会(各支部)と日本能楽会。後援は各都道府県教育委員会。このような文言で休日の一日、各地の能楽堂で開催される無料の体験講座を伴った能楽公演に、小中学生を勧誘しているわけです。私はこのようなチラシを手にして、とまどいと腹立たしさと、情けなさを感じてしまいます。前述したような能楽の重厚な体裁と、余りに

もかけ離れた姿に不審を禁じ得ないのです。普及を説く場合に、くだけた気安さが必要と考えるのは間違いです。易しい言葉使いや説明はもろろん必要ですが、問いかける精神までが骨なしの軽便になってしまつては、元も子も亡くす結果になるでしょう。これがただいま古典(伝統)芸能の普及を訴えるに際して、仕方なく必要な現実の方策なら、一方国の権威をかぶせて重々しく飾り立てる古典のありように、本気で検討を加えねばならないでしょう。最後に「こんなにも西洋の音楽が浸透しているのに、どうして日本の伝統(伝統)芸能は現在、こんなにも人々から遠いものになってしまつているのだろうか。なかなか親しみに感じにくいのはなぜか。」という学生の素朴な疑問と質問に、われわれは本当に腹をくくつて答えてやらねばならないと思えます。二〇〇八年、一年間のご厚誼を切望します。

(二月十一日)



安東伸元(あんどうのぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「鎧」

山田師久

年末、同僚十人で淡路島、洲本に泊まった。翌日は好天に恵まれ、マイクローバスで鳴門海峡の渦潮観光に行くこととなった。そこでわたしは途中にある小宰相(こざいしょう)の局の墓に寄ろうと提案した。提案はしたものの、いい加減なわたしは、自分で調べずにホテルの支配人をお願いしてその場所を調べてもらった。そのようなものがあるとは初耳です、と言っていた支配人は、小宰相のお墓の位置が描かれた絵入り地図を探し出してくれた。その地図を頼りに洲本を出発し、神戸淡路鳴門自動車道を西淡三原まで三十分。高速を降り、国道二十五号線を海沿いに南下して走ること三十分あまり、観光地図には途中内陸部へ向かう道からさらに山道を登ったところに小宰相の絵が描いてある。もちろんこのような大ざっぱな観光地図には左折するべき箇所が目印もなく、地元の人に聞くしかない。マイクローバスの助手席に乗った私は、速度を落とすよう同僚に頼み、道行く人を探した。ところが日曜日の午前中、田舎道を歩く人影はまったくなく、二十五号線から脇道に入ったところでようやく、通りかかっ

た人に「小宰相の墓は、どの道へ行けば…」と言いかけると、おじさんは首をかしげている。その時、文学遺跡の呼び方には、地元の人々独特の呼び方があるということをお願い出した。「お局(つぼね)さんの…」と聞き直すとてきめんだった。「ああ、お局さんの墓ならこの道をずーっと行って山手に入って行ったらいい。」これも大ざっぱな答えだったが、道は合っているらしいことがわかった。そこから十分あまり、行けどもゆけどもそれらしい山道が見当たらない。観光地図では何となく行き過ぎていく感じがする。また、きよろきよろと人を探していると農作業しているおばあさんを発見した。ここでも「お局さん」と言うて即座に反応してくれた。「だいぶん行き過ぎてる。もっと戻りなさい。」という返事だった。バスを引き返して五分ぐらいで、道を横切る仕事着のおじさんに出会った。尋ねると奇遇にも停めたバスの横手を指さして「この山道を登ったらいい。」という返事だった。「歩いてすぐだ。」というおじさんの言葉を信じ、全員マイクローバスを降りて山道を歩いて登った。舗装はしてあるものの勾配のきつい山道を歩くこと三十分、もうあきらめて帰ろうかという声が出始めたところに切り開かれた一画が見えた。広場の隅に石碑が寄せ集めてあり、最近整備したと思われる石碑がそこにあった。そ

れは昭和三十七年に建てられた平通盛と小宰相の追善供養塔と小さな五輪塔であった。保存会が丁寧に整備して、伝説を記した石碑まで建てられていた。ようやくたどり着いた安堵感から、にぎやかにしゃべっていると、下から四輪駆動の車がかなりのスピードで上ってきて止まった。中から出てきた女性が供養塔に歩み寄り、花を供えていた。「保存会の人ですか」と声をかけると、「いいえ個人で、お参りにきました。」という返事だった。今でも『平家物語』のロマンにあこがれてお参りする人がいるのだ。

さて『平家物語』巻九に「落足」・「小宰相身投」という段がある。ここには「越前三位通盛卿は、山手の大將軍にておはしけるが、其日の装束には赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧着て、黄川原毛なる馬に白覆輪の鞍おいて乗り給へり。」とある。源義経の鶴越（ひよどりごえ）の逆落としをきっかけに始まった生田の合戦では、平家方は海へと敗走した。越前三位通盛も源氏の武將に攻められ、内甲を射られ、自害しようするとところに七騎の敵に取り囲まれて、ついに討たれたとある。その時付き添っていた滝口時員という侍が、北の方である小宰相のところへ通盛の最期の報告に来た。小宰相は夫が合戦で討たれたという噂を心の中で打ち消し、もしやと可能性を期待していた。それが真実であることを告げられた

のだ。平家方の舟が八島へ到着する前日、小宰相は乳母の女房に通盛の菩提を弔い、手紙を都へ届けるよう言い残して、念仏百遍を唱え、南無と唱える声とともに、海に身を沈めた。

『平家物語』は引き続き過去にさかのぼり、三位通盛卿と小宰相の恋愛譚を語る。小宰相が上西門院の女房として宮仕えしている時、花見の御幸で一目惚れした通盛が三年間、小宰相に懸想をし続けた。ところが小宰相からの返事もなく、これで最後まで書いた手紙も届けようがなく、使者は仕方なく小宰相の車に投げ入れた。小宰相はその手紙を袂に入れて参内し、女院の前で落としてしまい、通盛卿が小宰相に宛てた手紙とわかり、女院が代わりに返事の歌を詠み、二人の恋は成就した。この恋愛譚は先の入水譚とあわせて平家滅亡の哀れさを象徴する物語となった。そして瀬戸内を中心に平家伝説がひろがり、この小宰相の局の墓のようなものまで作られたのである。

さて、私達はなぜかくも迷いながら、時間と労力を費やして『平家物語』の伝説の地を訪れるのか。ひとつは小宰相の呼吸した空気が景色をあげわい、その物語に思いを馳せ、感動するのだ。経済効率を重んじる現代社会においてはまったく無駄なことではあるが、このことが人の心を豊かなものにしているのだ。小宰相の石碑のあるところ

からは、海は見えない。昭和五十一年に刻まれた「お局塚の由来」によるとこの場所はもともと平家の落人の集落だったそうだ。そこに自決した平家一門の局等七人の古墳があったので、塚を建てたということだ。だから、それが小宰相の局とは限らないが、それでも供養塔を建てる意味があったのだ。こんなところになぜ、と言う謎も感動の一部となる。

後の時代にそのような感動を伝えた『平家物語』は、『源平盛衰記』のように読み本として読み伝えられる一方、『平曲』として琵琶法師によって琵琶の伴奏で語り伝えられた。さらには、さまざまな芸能となって人口に膾炙（かいしゃ）したといえる。この「小宰相」の話も能「通盛」となって上演され、その悲恋譚は多くの人々にロマンスを感じさせた。しかし『平家物語』には悲恋の話ばかりがあるのではなく、合戦譚が中心である。ましてや戦争は鎌倉時代から室町・江戸時代にかけては身近な出来事であった。文学になり、芸能になって合戦譚以外の物語が派生してさまざまな感動を伝えたのだろう。

ところで、狂言「鎧」の太郎冠者は鎧を見たことも聞いたこともなかったのである。それなのに太郎冠者は知ったかぶりをして鎧を求めに行く。そこですっぱにまんまと、「これが鎧だ」と欺され、鎧一式の目録を

買わされたのだ。庶民といえども誰もが知っていることを知らず、まんまとだまされてしまう。そこにこの狂言の滑稽があるのだ。そして、だまされたと分かってても、あっけらかんとして主人をからかって楽しむ。そこにまた室町の町衆の肝っ玉の太さがあるのだろう。そして私達は太郎冠者や主人のようなくったくのない笑いやおおらかさに感動を覚えるのである。



山田 師久（やまだ もろひさ）

大阪生まれ。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例「輪讀会」の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

正坐の女

～今年度、講座の終わりに～

森五六九

それはちょっととした嬉しい誤算であった。・・・ところで正坐というものは慣れてゆくものである。出講する俳優スクールにおいて少なくとも私の講座では生徒たちには皆正坐で授業を受けてもらっている。

落語の稽古に椅子掛けは似合わない。但し使う部屋は和室でも何でもなくごく普通に見られるタイル張りの固い床なので生徒たちには少々の苦痛を強いている。机と椅子を教室の半分に押しやりそこにできた八畳ほどの空間に一度に十数名ほどが坐る。

高校を出たばかりの彼等は正坐に慣れない者が多く中には最初十分ともない者もいたが、今ではおおよそ三十分程度は正坐を強いれるようになった。私がよしと言うまで当然足を崩すことはならない。先日は週一回続けてきた約一年間の授業も残すところ後二コマという事となり、その日は思いきつて一時間以上足を崩させずに授業を続けてみた。それでその時、その嬉しい誤算を感じたのです。何と彼等は最後まできちんと正坐のまま坐り続ける事ができたのだ。それは何もそんなにここで特筆すべき事ではないかも知れない。でもそれは私にとつ

てはまさに感激する出来事だったので。中でも一人の女子学生の変貌が私をいたく喜ばせてくれた。その学生ははにかみ屋さんで少し小悪魔的な魅力を持った女子。このクラスで彼女に初めて会った時、ちょうどコンビ二エンスストアの前で深夜何の目的もなくたむろしている若者といった印象だった。いつもクラスの端の方で身体全体を脱力させべちゃと坐り込んでいる。いや、へたり込むという表現の方が合っているかも知れない。せつかくいいフェイスをしているのにまるで台無し。私は彼女に対し勿体無いという焦燥の念ばかりが募った。私の授業では一コマ九十分の半分近くを口移しによる声出しの稽古に当てている。落語家の多くが最初に学ぶ「東の旅」という落語の発端部分をここでは咄家の稽古と違いい対十数名で行うのだが、先に申しただ通りこの時はやはり正坐である。でも彼女はとうとうたつて猫背になった。何度注意した事だろう。「ええ女の基本は姿勢やで。：そう、そうしたら君はええ女や」他の生徒も皆一樣に大きく頷いてくれたのが結構後押しになった。姿勢ひとつで人の印象はがらり変わるものである。以前、松竹座で上演された「蝉しぐれ」という芝居を見に行った事がある。藤沢周平原作の時代ものを舞台化した作品で主役が片岡愛之助でその恋人役が相田翔子だった。相田翔子とい

えば私の世代は「哀しい熱帯魚」など大ヒット曲を飛ばしたウインクのメンバーというイメージが強いが今は舞台女優としても活躍されている。私は彼女のまず出に息を飲んだ。その歩き姿から坐っている時の姿勢、立ち振舞が今も鮮明に脳裏に焼き付いている。「いい女」の条件はまず正しい姿勢である。

生徒にとつての最初の一年間は言うまでもなく基礎を固める重要な時期だ。プロになるために発声も含めた身体づくりと行儀を身につける事が最重要課題だと思っっている。発声の基本は腹式だがそれも臍下丹田をちゃんと意識できてこそ成り立つものだ。臍下丹田を意識するには腰を立てきちんと正坐して行わなければならない。いよいよ冬休みを迎えるというその学期最後の授業日。去年の暮れであるが、私は毎日欠かさず「東の旅」をきちんと声に出して稽古することをそこにいた全員と約束した。そして正月明けのその日を迎え、私は思いのほか嬉しい誤算に出会うことになった。中でも私を一番喜ばせてくれたのが件の彼女の正坐姿だった。以前とは違って変わり無理なく腰を立て凜と坐っていた。

だろう。他に多くの先生方もおられるし何も私がそう導いたと言うつもりはさらさらでないが、ただ正坐のあり方ひとつで他人が受ける印象はこれだけ変わるものだという事だけは言っておきたい。

落語だから当たり前のように正坐で授業を始めた。正坐をすると肚を意識しやすくなり臍下丹田から声を出すという腹式呼吸の会得にも効果的である。ある日大和座での謡いの稽古の際、私の真前に坐していたのは金久蒼汲だった。その時、私は師安東の声を聴きながら彼の背後ですつとその後の姿に魅入っていた。師弟はやはり似るものである。腰を立て背筋が自然にすつと伸びた彼のその後ろ姿に私は惚れ惚れする思いでいた。彼もまた師安東同様、精神的な強さと若いながらも成熟した人格の持ち主である。俗に「肚が坐る」という言い方をするが「正坐」とは決して無関係ではない。この事について齊藤孝氏の著「子供たちはなぜキレるのか」（ちくま新書）に詳しいので一部そこから引用させて頂く。「正坐は、日本人の心性のあり方に大きな影響力をもっていた。かつてはそれが生活に溶け込みすぎていて、身体文化としての意義をとりたてて認める必要もなかった。一方で、現在は、若い人が正坐をする機会が激減し、その意義を言うだけで現代に逆行する雰囲気が出てしまう。（中略）だれもが当たり

前のように、長時間の坐に耐え得た時代には、『落ち着いた気持ち』というのには、たんなる気持ちではなかった。坐ったときの、下に重心が降りて、呼吸が深くなる身体の実感が、『落ちつき』そのものであった。」氏はその著の中ですぐにキレがちな現代の若者と衰退しつつある「腰肚文化」との関連を説いておられる。そして最後には「型の教育力」の再生を提言されている。これは今、大和座が、安東が提唱している「古典による人格形成」にも通じている。

今回もまた学生たちとの関わりで私自身多くのことを思考し学ぶきっかけを得ることができた。伝える事が自身学ぶことの大きなきっかけになった。落語家になって、大和座の一員になって、そして講師になって、心底よかったと改めて思う。「育てあい、育ちあい」・・・本日一月十六日、今年度のスクールでの講義を終了とさせて頂きます。この紙面を借りて生徒諸君に最後お礼が言いたい。一年間本当にありがとうございました。新年度も機会あらばまた共に学びましょう。

(了)

二〇〇八年一月十六日



森五六九（もり いさく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言
方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大
阪シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECOA
チストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷
高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ
「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ま
しい芸能人の在り方を模索中。

物言つからだ3

金久蒼汲

武道の訓練である稽古は、物事に囚われ
て固定してしまうような心の動き方を抜け
出して、何ものにも囚われないで自由自在
に動けるような心の状態に至る訓練である、
という考え方があります。この考え方はお
そらく武道だけに限らず、茶道や華道、書
道など「道」と呼ばれるすべての学問・
技芸に通じるものであると思います。とり
わけ芸道である狂言の稽古は、身体能力の
訓練を繰り返すことで、心（精神）の能力
を発達させることが目的のひとつであり、
このような稽古を重ね、心身を鍛錬してい
けば、意識して動作する状態から無意識の
うちに手足や身体がおのずと動くようにな
るといふ点で、武道に共通するところが多
分にあると思うのです。狂言には決められ
た所作（型）や構えがあり、一見するとそ
の型や構えに心も身体も抑制され固定され
てしまいがちですが、その意味を正確に理
解し無意識のうちに体現できるようになる
ことで、それが思考行動の基礎となり、舞
台のみならず日常生活においても、自由
自在に思想を構築できるようになるのです。
毎年一月に催される大阪芸術大学舞台芸

術学科の狂言レビューが今年も催されま
した。この日のために学生たちは、週一回
の授業で年間を通して狂言という自国の古
典を学び、また約半年をかけて狂言演目を
一番ずつ稽古し、その成果を本物の能舞台
で発表するという貴重な経験をしたわけで
す。本番を終えた彼らに感想を聞くと、実
にさまざまな反応が返ってきました。「稽
古中は不自然に感じていた構えが、装束を
着けて能舞台に立つと、そう為らざるを得
ないように感じた。」「彼はモダンダンスや
創作ダンスを得意としていて、よほど自分
の心と身体について気付きが多いのでしょ
う。初めのうちは普段とまったく違う表現
方法に、彼の心と身体は混乱し戸惑ってい
たのだと思います。しかし稽古を重ね演目
を理解することで徐々に感覚が慣れ、装束
を着けて能舞台という空間に立つことで、
その構えの必然性に納得し、自然に身体が
動いたということなのでしょう。正確な演
技とは言い難いものの、そのように感じら
れたことは大きな発見で、彼の感覚の中に
狂言という古典が組み込まれたことは間違
いないと思います。小舞を舞った留学生は、
謡の歌詞を正確には理解できないことに悩
んでいた様子でしたが、これまで故郷で培っ
てきた感覚や感情に置き換えながら、その
ぶん一挙手一投足に至るまで繊細で想像力
にあふれた見事な舞を見せてくれました。

また普段の彼らの演劇には欠かすことのできない音響や照明、大道具などの助けが一切ない能舞台の簡素な空間に戸惑い、「舞台が広く感じた。」「裸の自分を見られているみたい。」など、何も無い空間で自分を表現しなければならぬ重圧を訴える声も多く聞かれました。いかに演劇に精通している彼らでも、長年月に渡って試行錯誤を繰り返して、研磨されてきた古典の前では手も足も出ません。ただただ先人の知恵や工夫、想像力や感性に驚くことしかできません。日ごろ学んでいる演劇と共通する部分はたくさんあるのですが、下手に芝居心を入れようとするとたちまちバランスを崩し、狂言が崩壊してしまうのです。たった一年の稽古で、冒頭のような自由自在に動ける心の状態を手に入れられるとは思えません。それでも彼らは稽古を繰り返すことで心と身体の変化に気付く、突破口を見つけ、彼らなりの狂言をみせてくれたように思います。これまでの自分の表現手段を断たれた彼らは、能舞台に立つことで裸の自分をさらし、改めて自分が何者であるかを考える絶好の機会になったのではないのでしょうか。毎年多くの学生がこの授業を履修し、狂言を稽古することで自分と向き合い、これまで気付かなかった自分を再発見して、それぞれの表現方法を模索してきました。私ももちろんその一人で、今なお心

と身体は変化を続けています。狂言という古典の必要性を理解し、直に触れる機会を与えてくれた母校に、私は感謝しなければなりません。演劇を志すものにとつて狂言の稽古とは自分が何者であるかを映し出す鏡であり、それぞれの表現方法を模索するための最適な出発点であると思います。



金久蒼汲（かねひさ そうきゅう）
広島県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。二〇〇三年イラン公演、二〇〇四年インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

「週末は稽古」

久保朋子

週末、モダンバレエのレッスンと大和座の稽古が重なる日があります。日曜日の朝、鞆にはバレエシューズと白足袋を入れて、家をでます。昼から夕方までバレエを踊り、日が沈むと小舞を稽古します。

バレエのレッスンは身体作りから始まります。バーという固定されたつかまり棒を使ったレッスンをし、踊るための身体を作ります。バレエの動きは非日常です。その姿勢は特徴的で、肩を下ろし、胸を開き、お腹をぐっと引き上げて身体の重心をみぞおちあたりにまで持ち上げます。この重心を高く保つということは、軽やかな跳躍や安定した回転をする為にとっても重要です。また、引き上がった身体で踊るときは肺呼吸をしています。バレエには台詞の代わりに音楽があります。そして、腕の動き（ポール・ド・ブラ）はさまざまな感情を語ります。腕を動かすときもまた、みぞおちや肩甲骨から動かすことを意識すれば、ダンスの表情が豊かになります。レッスン場にある大きな鏡を見て、自分の動きを確認し、どのように身体を使えば美しく見えるのかを研究します。そして音楽に身を投じ、心

を空っぽにして踊ります。

レッスンを終え、頭の中にまだワルツが流れている私は千里山の稽古場へと急ぎます。稽古場に着くと足袋を履き、挨拶をして、私はしばらく正座をして稽古を見学します。謡や狂言の台詞を聴き、頭の中のワルツを謡のリズムへとスイッチを切り替えていきます。そしてすっかり上がっている身体の重心を、正座を保つことで臍の下まで落とします。謡の稽古に参加し、腹式呼吸をし、丹田に力を込めて声を出します。小舞の稽古に入り立ち上がると、意識はさらに下に下がります。足の裏で床の板を確かめるように、じりじりと足を運びます。稽古場に広い鏡はありません。小舞を稽古するとき、正面を見ているけれど、私は身体の中を見つめます。身体の中にある芯や軸みたいなものに静かに集中させます。少しでも揺らぐと体はぐらぐらとします。しかし地謡の前で舞うとき、身体は耳になります。そのとき私の心は空っぽになります。二つの稽古のある週末はとても素晴らしい一日です。バレエにより身体を目覚めさせ、小舞の稽古で身体を研ぎ澄ませます。さて、身体という観点からバレエと小舞の違いを述べてきましたが、表現という視点から見ればこの二つは共通しています。バレエで教わったことは、小舞を舞うときそのまま反映されます。例えば、静の中に動

があり、動の中に静があるということ、型と型の間の動きに気を抜いてはならないということ、踊るときには我を無くして音楽に溶けてゆくということ、そして心で踊るということ……。小舞もバレエも私にとつて変わりません。稽古を終える心は浄化され、空気が澄みきっているのを感じます。バレエを始めて二十年が過ぎました。継続の糸は幾度か切れそうになりながらも、今も踊っています。私にとってバレエは血や骨のようなものです。私の身体と精神は、幼いころから通う、神戸のレッスン場で創られました。嬉しいときも辛いときもレッスン場で踊っていました。多くのことをあの場所で学びました。振り付けをしてくださる恩師、先生や先輩から、バレエのステツプ以上のものを教わります。もしモダンバレエを踊っていなければ、演劇を学びたいと大阪芸大に通うことはなかったと思います。もし神戸のレッスン場で学んでいなければ、今、安東先生の言葉がこんなにも身体に浸透していません。小舞を稽古していると、バレエで自身の中に蓄積されたものを通じ、そのもつともつと深い部分が覚醒されていくような感覚です。私は日本人の血であることを感じ、安心してバレエを舞うことができます。

私はなぜ踊り続け、週末を稽古に費やすのかを考えます。舞台の本番のためだけで

はありません。私は自分自身のために稽古を続けます。一人で美しく立つことのできる凛とした日本人女性、『大和座撫子』になるべく、今週末も稽古に参ります。

谷正也と申します。今回は、私が大和座に出会った話と古典への気持ちを表現したいと思います。安東先生に出会ったのは関西大学2年生である二〇〇二年でした。私のゼミの先生が安東先生を授業の特別講師としてよばれました。授業後、教授の研究室に集まり妙に興奮を覚えて安東先生に質問を投げかけた事を覚えていません。そして安東先生から、「時間のある時に稽古に来なさい。」と言葉を頂きました。興奮冷めやらぬまま稽古に参加しました。大学で聞いた以上に近い距離で朗詠される謡には何も言えませんでした。

私は高校時代に海外生活を体験しています。日本に帰国した後大学へ進み、何も答えの見つからないまま大学生活をしていました。日本人でありながら、日本人で無いように浮き立ちあがって歩く同世代の学生を見るにつけ不思議に感じていました。今振り返ると、安東先生の謡はその疑問に答えの一端を見せてくれたのだと感じます。加えて若手の演者達が多くいることにも驚き、今まで自分が見た事もない世界に身を浸している人たちに一種の憧れと敬服を感じました。

その後、身も定まらぬまま、稽古を覗きに行ったり行かなかつたりが続きました。再度、自分自身の生活を振り返るために、私はカナダとアメリカに2年間の留学に行きました。その間中も、安東先生からは何度も励ましのお手紙などを頂き続けました。留学期間中の悩みは自分が何処の国から来た人間なのかが証明できない事でした。アジア移民が多くいるアメリカ、カナダでは顔がモンゴロイドだということだけでは私が

日本人だという証明にはなりませんでした。何度もアメリカの友人に日本の歌を聞かせるとせがまれ聞かせると「ロックと変わらないじゃないか」と、言われるのです。確かに彼の発言には何も間違いはないのです。今、日本人が普通に聞いている曲は、ただ日本語の歌詞で使用されている楽器も音符も海外からの輸入品なのです。つまり、この曲を聴くと日本の曲だとは確実には言えなくなってきたのです。

帰国後、私が日本人であることを証明したい、加えて自分の人間としての根幹となる物を蓄えたく、稽古に参加を始めました。稽古に行けば行くほど、自分の体が今まで感じた事のない苦痛を感じました。なぜなら、それは今まで経験した事も体験した事もないことばかりだったからです。例えば小舞をみても、独吟から立ち上がった時に、体の体重は何処に位置しているのか。これは、今までの生活ではありえない位置に体重を乗せています。膝を落とし、腰をきめ立つ姿は意識をして習得するしか方法がないのです。それらを意識して、少しずつ少しずつ己の体に蓄積をしてゆく事が最大の近道なのだと思います。私にとつて、多くの方の稽古を拝見し諸先輩方に指導を賜る事で、一步一步進んできたと確信しております。未だ自分が日本人である根幹を着実に身に着けたとは言い切れません。しかし、今後、より一層稽古に邁進し、自問自答を繰り返してゆく事で答えを探り続けてゆきたいと思っております。

訂正とお詫び

大和座通信第九十三号(二〇〇七年十一月十二日発行)の井上放雲の原稿引用部分(第十項)に、本来ふり仮名になるべきところが、漢字の前に表記されるといふ誤りがありました。訂正をもってお詫び申し上げます。なお、訂正済の大和座通信はホームページからダウンロードが可能ですので、どうぞご利用ください。

《訂》 ふり仮名は○内に表記

「(前略)そもそも、狂言おかし」とは、必ず数人(しゅにん)の笑いどめくこと、俗(しよく)なる風体(ふうてい)なるべし。笑みの内に楽しみを含むと云つ、これは面白くうれしき感心なり。この心に和合して、見所人の笑みをなし、一興を催(もよお)さば、面白く、幽玄の上階(じょうかい)の狂言(おかし)なるべし。これ狂言(おかし)の上手と云えり。(中略)それにつけても、数人(しゅにん)愛憐(あいれん)の愛嬌(しお)を持ちたらん生得(しょうとく)は、芸人の冥加(みょうが)のみよ(うが)なるべし。言葉・風体(ふうてい)にも、俗(しよく)なることをなさずして、實所(きしよ)・上方様(じょうほうさま)の御耳(おんみみ)に近からん利口・狂談を嗜(たしな)むべし。かへすがへす、狂言(おかし)なればとて、さのみに卑しき言葉・風体(ふうてい)、ゆめゆめあるべからず。心得べし」

四月十日(木) 午後2時開演

A & Hホールシリーズ公演 VOL
『古典伝統芸能と出会うひととき』その五十二

《笑劇の古典力》 古典を背骨に、 小舞

小舞が描き出す情景を楽しむ

心地よい日本語のリズム

狂言『酔薑』

酔売り 原 斗轟
薑売り 寺西将愷

『膏薬煉』

鎌倉方 金久蒼汲
都 方 安東伸元
後 見 原 斗轟

歌唱演習

日本語のセンスを磨く、

室町の民衆「狂言小唄」

入場料 会員 一五 円

一般 二〇 円

学生 一五 円

小学生以下無料

お問い合わせ A & Hホール

〇六六八七三二六七

編集後記

安東先生の恩師であられる山崎馨先生が和泉書院から『日本語の泉』という本を出版されました。大和座の若手にといい事で本を寄贈してくださり、私も一冊頂戴致しました。

本のはじめのところで、日本語の変化してきた様相を大河にたとえて、現代日本語は古代日本語という上流の水が、幾つもの支流の水を集めながら流れくだってきた下流の姿であり、その上流の小川も、もとは小さな泉から湧き出てきた水であると述べておられます。この大河のたとへは、日本語の変化にのみ適応されるのではなく、様々なことにも当てはまると思われました。今回谷君の原稿を読み、国際化と謳われる中、若者が直面するアイデンティティーの問題もこの「小さな泉」を顧みることが疎かになっていく日本の現状が要因しているのではないかと思えます。「小さな泉」なくして「大河」は存在しえない訳です。山崎先生の『日本語の泉』は「日本語」についてのお話ではありますが、それだけに留まらず、危険な飽和状態にある現代日本社会において、なにか答えを求めてモヤモヤしている若者に考えを整理するヒントを与えて下さっているように思えました。本を寄贈して下さった先生にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、大和座の一年を締めくくる「艸言

会」が先日無事に終わりました。何とも暖かいお客様に見守られ、本当に気持ちの良い舞台になりました。狂言十九番、小舞十三番というプログラムでありながら、楽屋もゆったりとした雰囲気にも包まれ、本当に充実した一日だったと思います。楽屋でお手伝いをして下った出演者、関係者の皆さまに感謝致します。本当にありがとうございました。皆様、来年の艸言会もどうぞご期待ください。

秀

通信に使用した挿絵は、山崎先生の『日本語の泉』の表紙に使われている、先生の自刻木版画版です。本の詳細案内は大和座ホームページをご参照ください。

発行日 二〇〇八年 二月二十日

編者 許 秀美

発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五〇八四二

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza/>
e-mail: NQC57616@nifty.com